

中高6ヶ年を見通した古典の教材編成
(その試行的実践3)

筑波大学附属駒場中・高等学校 国語科

石川 祐爾・石塚 修・鹽谷 健
鈴木 信好・須藤 敬・関口 隆一
福田 孝

中・高6ケ年を見通した古典の教材編成

(その試行的実践3)

筑波大学附属駒場中・高等学校 国語科

石川 祐爾・石塚 修・鹽谷 健
鈴木 信好・須藤 敬・関口 隆一
福田 孝

1・はじめに

本校国語科では、学校の特色である中・高6ケ年をどのように国語教育に生かせるかということを中心として、プロジェクトを進めてきた。現在は、古典教材、主として古文教材の編成を検討している。これまでは、「着物」「伝統建築」の名称、「いろはガルト」「百人一首」の定着度、「季節感」の実態といった、種々の「古典素養に関する調査」を実施するとともに、試行的授業実践として、入門期、定着期の授業比較や、中学における『万葉集』『古今和歌集』『新古今和歌集』の授業実践を報告し、検討してきた。今年度は、「季節感」を主題とした単元学習の試行的実践を報告し、その検討を図ることとする。

筑波大学附属駒場中・高校での、1994年の調査(注1)では、中3～高1の400名中、たとえば、「春」の季節を感じる景物として、10名以上が指摘したものを挙げてみると、

桜・176 入学式・52 菜の花・22 梅・21 つくし・20 たんぽぽ・19 春休み・17
芽・13 雪解け・11 花見・10

ということになる。このデータからも、いかに現在の中・高校生が、古典文学理解のために不可欠ともいえる「季節感」から遠く、関心もないままに生活を送らざるをえない環境で暮らすことを余儀なくされているかを、垣間見ることができるであろう。しかし、このわずかに残っていると言うべき生徒の中の「季節」への関心を生かしつつ、授業ができないものなのだろうか。そのためにはどのような授業の試行的実践が可能となるのだろうか、ということ考えた。ただ漠然と「季節」といっても生徒自身は戸惑うのではないかとすれば、何か、日本の文学伝統にのっとった「季節」へのアプローチの方法はないのか、そのような問題意識から、たどりついたのが、「春秋優劣論」の文学伝統を主題とした単元学習である。以下はその報告である。研究授業は、本校、第21回教育研究会において実施した。

II・試行的授業の実践報告

(1) [中学—季節感を喚起する古典の学習指導—]

(日 時) 平成6年11月18日(金) 第1時限

(授業者) 石塚 修

(授業クラス) 中学3年A組 男子41名

(研究テーマ) 中・高3年A組を見通した古典教材の編成

(教材) 『枕草子』『春はあけぼの』

(授業の展開)

1 単元名

「日本人と季節」 春秋の争いを中心として

2 単元設定の理由

最近の古典教育の中で、古典的素養が乏しいために、授業に時間が多くかかったり、生徒が古典に対してなかなか積極的に取り組まないなどのさまざまな問題が出てきている。今回は、古典における季節の扱いを中心に学習し、古典への興味関心を持たせると共に、現在の生活と季節との関わりについても考えを深めさせていこうと考えた。さらに、「春秋の争い」をはじめとして、日本人の季節へのさまざまな関心と、それぞれの文学における個性を捉えつつ、生徒自身が自分の感性と比較してゆくことで、自己の感性の涵養に役立つであろう。また、多くの古典に扱われている季節感を持つ景物を扱い、調べていく中で、言語に関する知識や関心も培われることであろう。

3 単元の内容

「私の春秋優劣論」一	作文	1時間
『古事記』中巻 応神天皇記	「秋山の神と春山の神」	1時間
『万葉集』巻一 雑歌 額田王	「冬ごもり春さり来れば」	1時間
『更級日記』	「資通との語らい」	3時間

以上は 小学館 日本古典全集による

「私の季節感」 和菓子の名前から		1時間
「春はあけぼの」 枕草子	「中学校 国語 三」 学校図書	2時間
『独ごと』 上島鬼貫	「四季の月・四季の雨」	1時間

復本一郎『鬼貫の「独ごと」』講談社学術文庫による

4 指導の目標 〈表現・理解・言語事項〉

- 1, 日本人が季節を表現していくとき, どのような表現を典型としていったかを考えさせる。
- 2, 古文の表現に慣れ, 内容を理解できるようにする。
- 3, 歴史的仮名遣いについて理解し, 正確に音読できるようにする。
- 4, 自分の季節感を明確に文章として表現し, 他の文章とも比較してゆく中で, 自己の表現力を高められるようにする。

5 指導計画 (6週11時間)

時 間	指 導 内 容	指導上の留意点	備 考
第1時	「私の春秋優劣論」一 プリント 「日本人と季節」その一の課題 作文。	自分の季節感を具体的に根拠をあげて説明させる。 自分の立場を明確にして論じるようにさせる。	課題一
第2時	『古事記』中巻 応神天皇記「秋山の神と春山の神」 『古事記』についての説明。 伝説としての争いを考えさせる。 「春」と「霞」・「秋」と「紅葉」の関係を捉えさせる。 プリント 「日本人と季節」その二の配布。	日本人が季節の代表として春秋を捉え, それを擬人化して扱った理由を考えさせる。 前回の自分の評価との捉え方の違いを考えさせる。 きちんと自分で調査するように指ボする。 五・七調に注意して音読させる。	プリント・ 『国語の資料』 課題二 プリント: 『国語の資料』
第3時	『万葉集』巻一 雑歌 額田王 「冬ごもり春さり来れば」 『万葉集』についての説明。 額田王について 「春」「秋」のよい点・悪い点をまとめさせる。 「我は」の助詞「は」について考えさせる。 「春秋の争い」が『古事記』とはどのように捉え方が違ってきているかを考えさせる。	歌の公私両面の役割について理解させる。 「対句」表現に注目させ, まとめさせる。 文学的な遊戯的要素が濃くなってきていることを理解させる。	
第4時	『更級日記』 「資通との語らい」(1) 「日記」と「日記文学」の違いについての説明。 「歴史的仮名遣い」について理解させる。	『更級日記』についても理解させる。範読・斉読を通して, 慣れさせる。 歴史的仮名遣いに注意させる。	プリント: 『国語の資料』
第5時	『更級日記』 「資通との語らい」(2) 通読(範読)・斉読。 前半部の内容の読解。 場面の把握をさせる。 どこが議論の中心となっているかを考えさせる。	誰が誰と語らっているかを考えさせる。 楽器を季節感とあわせていることに注目させる。 歴史的仮名遣いに注意させる。	

第6時	『更級日記』 「資通との語り」③ 通読（範読）・斉読。 後半部の内容の読解。 貴公子と女房たちとの交流について考えさせる。 和歌の内容についての説明。	和歌のやりとりについて理解させる。 どこに読み手の個性があらわれているかを考えさせる。 プリント「日本人と季節」その二をまとめた資料一のプリントの課題学習の発表をさせる。 季節と景物との関連をおさえさせる。	資料一の利用 資料一の利用 課題三
第7時	「私の季節感」和菓子の名前から 課題学習による発表をさせる。		
第8時	『枕草子』「春はあけぼの」① 『枕草子』についての説明。 「雪のいと高う」「虫は」	清少納言についてもふれる。 回想的草段・類集的草段についてもふれる。	『国語の資料』
第9時 本時	『枕草子』「春はあけぼの」② 本文の音読。 本文の読解。	歴史的仮名遣いに注意して音読させる。 清少納言がどのような景物に季節感を見ているかに注意させる。	教科書
第10時	『独ごと』「四季の月・四季の雨」 俳諧について 鬼貫の季節感と前回の清少納言の季節感とを比較して考えさせる。 参考として「正月一日」を配布する。	『おくのほそ道』（四月）の復習をかねて行う。 自分の季節感とも比べつつ考えさせる。	プリント四 プリント五
第11時	「私の春秋優秀論」 他人の書いた春秋の好きな理由について読み、自分の考えと比較しつつ、反論を作らせる。	根拠を明確にして自分の意見を書くように注意する。	課題 四

6 評価

- 1, 我々の季節感が、どのような歴史的伝統に支えられているかを理解できたか。
- 2, 古文特有の表現に慣れ、内容を理解できるようになったか。
- 3, 歴史的仮名遣いを理解し、正確に音読できるようになったか。
- 4, 他人の文章を読んで、自分の考えと比較し、根拠を明確にして意見が書けたか。

7 資料

『古事記・上代歌謡』 萩原浅男・鴻巣隼雄 校注訳 小学館日本古典文学全集
昭和46・1

『万葉集 一』 小島憲之・木下正俊・佐竹昭広 校注訳 小学館日本古典文学全集
昭和48・11

『和泉式部日記・紫式部日記・更級日記・讃岐典侍日記』

藤岡忠美・中野幸一・犬飼 兼・石井文夫 校注訳 小学館日本古典文学全集
昭和46・10

『更級日記』 秋山 虔 校注 新潮社 日本古典集成 昭和55・7

『更級日記』 関根慶子 全訳注 講談社 学術文庫 昭和52・8

『枕草子』 渡辺 実 校注 岩波書店 新日本古典文学大系 平成3・1

- 『枕草子全注釈 一』 田中重太郎 角川書店 昭和47・12
『枕草子解環 一』 萩谷 朴 同朋舎出版 昭和56・10
鑑賞日本の古典『枕草子・大鏡』 稲賀敬二・今井源衛 尚学図書 昭和55・5
研究資料日本古典文学『随筆文学』 大曾根章介・久保田淳 他編 明治書院
昭和58・4
『鬼貫の「独ごと」』 復本一郎 全訳注 講談社 学術文庫 昭和56・8
『和菓子』 別冊淡交6号 平成5・6・26
『王朝人の四季』 西村 亨 講談社 学術文庫 昭和55・4
『柳は緑 花は紅』 久保田淳 小学館ライブラリー 平成5・6
『花ごよみ』 杉本秀太郎 講談社 学術文庫 平成6・9

(本時の計画)

1 目標

- 1, 「春はあけほの」を読解しつつ, 清少納言の季節感を理解し, その個性を考える。
- 2, 「春はあけほの」の表現の特色を理解し, その効果について理解する。
- 3, 歴史的仮名遣いを理解し, 正確に音読できるようにする。

2 学習指導過程

	時間	学習活動	指導内容	指導上の留意点
導人	10分	前時の復習をする。 「春はあけほの」全文を音読する。	前回の授業の内容を簡単に説明する。 教師の音読について生徒に斉に音読させる。 季節をあらわす景物に注意させ, 指摘させつつ読ませる。	生徒を指名して, 『枕草子』がどのような作品かを, 簡単に発表させる。 前時の終わりに, 予め自宅で音読してくるよう指示しておく。 歴史的仮名遣いに注意して音読するよう指示する。 景物については, 鉛筆などで印を付けさせる。
		季節ごとの景物についてまとめる。	「春」「夏」「秋」「冬」の季節ごとに作者が注目しているものについて, 指摘し発表する。 <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; width: fit-content;"> 「春」 あけほの 「夏」 よる・月・ほたる 雨 「秋」 夕暮れ・からす 雁・風の音・むしのね 「冬」 つとめて・雪・霜・炭・火おけの火 </div>	各自が音読しながら指摘したものを参考にして発表させる。 「春はあけほの」のような表現についても考えさせる。 『日本の伝統色』を回覧し, 「紫」の色彩が現在のものと違うことを理解させる。 『国語の資料』の写真を見るよう指示して, 景物を理解させる。 それぞれの景物が, どのような季節感を醸し出しているのかを考えさせる。

展開	30分	作者独自の季節感と思われる景物について考える。	<p>各自の発表を基にまとめたものから個人的と思われるものを指摘させて、発表させる。</p> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px;"> <ul style="list-style-type: none"> ・時間帯に注目している。 ・色彩感覚に富んでいる。 ・四季それぞれに均等に注目している。 ・自然から人事に涉っている。 ・細かい観察眼によって伝統的世界に新味を加えている。 ・季節・時間・状況・評価の組み立てになっている。 </div> <p>など</p>	<p>これまでの学習した作品とも比較させ、『枕草子』の独自性を考えさせる。</p> <p>資料一「私の季節感」も参考にして、各季節と景物の固定した典型について考えさせる。</p> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; text-align: center;"> <p>「春」 霞 梅 鶯 「秋」 月 紅葉 雁 菊 時雨</p> </div> <p>など</p>
整備	10分	<p>作者の考えが以後の季節感に影響したことを理解する。</p> <p>本時のまとめ</p> <p>次時の予告</p>	<p>『国語の資料』72ページの後鳥羽院の歌を取り上げ、内容を考えさせる。</p> <p>『枕草子』の季節感に作者清少納言の個性がよく表されていることを理解させる。</p> <p>俳諧の世界の季節感を扱うことを予告する。</p>	<p>「春はあけほの」も『枕草子』以降季節感を表す景物として定着していくことを補足説明する。</p> <p>「あけほの」や「鳥」といったそれまでの和歌の伝統的世界に取り込まれていなかった景物を自分の季節感のなかに取り入れていったことに対して評価すべきであることを示す。</p>

3 指導準備

『国語の資料』 宮腰 賢編 正進社

『日本伝統色 色名事典』 日本流行色協会編 日本色研事業 昭和59・12

(今回の試みについての検討)

今回の「季節」を主題としての単元学習の授業実践の前半については、石塚 修「古典への関心を育てる授業—「和菓子の名前」から季節感に注目させる—」(『人文科教育研究』第22号・筑波大学人文科教育学会・1995/8・pp223~230)に、すでに実践報告としてまとめている。その中に、いく人かの生徒の声として、いままで見過ごしていた身の回りに注意をむけ、季節に対する興味が出てきたというものがあった。また、和菓子店へ自身で取材し、話を聞いたり、名前を事典などで調べる中で、自分たちが生きている世界が、知らず知らずのうちに、日本の伝統文化の中に置かれていることを再認識させる、よい契機となったとも考える。古典というと、何か別の遠い世界であって、それを「知識」として「教える」ことが、古典の授業という、先入観をすてて、むしろ、たとえ少しでも生徒のなかに残っている「季節感」を出発点として、生徒自身が、日本の伝統文化の中へと入り込んで行き、その過程で、古典を学習していくことによって、より広い自分のことばの世界を獲得できることに気付かせていくべきであろう。そうすれば古典学習への意欲も高まり、現在、国語教育で大きな課題の一つとなっている。「古典離れ」「古典嫌い」も減らすことが可能となってくるのではなからうか。以下、「私の春秋優劣論 二」で、生

徒が展開したいくつかの例を、その成果として紹介する。

「私の春秋優劣論」は、この授業展開のなかで、最初に作文させた「その一」「あなたは季節で言うと『春』と『秋』、どちらが好きですか」「その季節を好きと答えた理由を書きなさい」という課題作文の中から、「春」組と「秋」組とに分け、それぞれを「好き」とした理由に、各自が反論していく形で作文させたものである。ここでは、紙幅の都合もあり、それぞれ「A」～「G」・「A」～「F」として生徒に示した各意見に対して、それぞれその反論を試みさせたものの中から、ここでは「A」についての生徒の反論を紹介する。

〈春〉

A 秋というのは、暑い夏が終わった後に来る。僕は夏は暑いけれども、何かに対して（部活や遊びなど）燃えることが出来て好きだ。秋というのは、その終わりを告げるので寂しい。しかし、春というのは厳しい冬（僕は以前札幌に住んでいた）の終わりを告げる。だから、春の方が好きだ。

《A君に反論。秋の方がやはりすばらしいのです。》

- ・ 秋はたしかに、夏のおわりである。部活などでがんばってきた夏が終わるのはたしかである。君はそれが始まるのが好きだから春が好きだと書いているが、秋にはそれが終わることによって結果を出すことができ、やりとげたあとの充実感を感じるほうが僕はいいと思います。夏を必死にがんばって、その自分の成長を結果をだすことによって知る。このことは始まるという喜びより大きいと僕は思います。さあ君も秋を好きになりましょう。

A組 三枚純一郎

- ・ A君の文章には「夏が好きで冬が嫌いだ」という前提がある。その根拠として「夏は何か燃えられる」「冬は寒さが厳しい」ということを挙げている。この根拠がそもそも誤りだと思う。「夏は暑いけれども何かに対して燃えることができる」と書いてあるが、暑い夏よりもずしくなってきた秋の方が燃えることが出来ると思う。「冬は寒さが厳しいからきらい」「僕は以前札幌に住んでいた」とあるが、寒い冬にこそ札幌などでは雪祭りなどのイベントがあり、楽しいし、寒い地方特有の文化があると思う。

それに、この文章を読むと、A君は夏が一番好きで、冬が一番きらいで、春は夏が始まり冬が終わりだから好き。といている。つまり春は夏の附属品のようなもので、春そのものが好きではないのだ。春・秋、どちらが好き？と聞かれて、夏が好きだけど、春・秋では春

の方が好きというだけのことなのだ。ようするに、春はそれほど好きではないということだ。

B組 篠原雄介

- ・ 夏は暑いけれども、いろいろと燃えることができるという点は賛成で、秋はその夏の終わりをつげるから、秋はさびしいとっている点は理解できる。そういう部分は秋にはあると、秋の好きなほくも考える。しかし、そのさびしいと感じる部分は解釈によっては、風情があると感じることはできないだろうか？夏に緑だった葉が紅葉して美しくみえたかと思えばあつという間に葉が落ちていくというあわれさは、趣があるといえると思う。以上のことから、ほくは秋の方がやはりすばらしいと思う。

また、春は厳しい冬の終わりをつげてほっとするから好きなのか、それとも、暑い夏に向けて、春はそのことを感じさせるから好きなのか、どちらなのかよくわからない。

B組 一杉太郎

- ・ 夏は何かに対して燃えるたしかにそうであろう。(実際私も部活に励んだ)しかし、秋がそれを打ち消してしまうとうのはどうであろうか。私の実感として感じるのは、スポーツの秋などというように夏の充実したものを秋で試すということである。気候的にも少し涼しくなっていくため活動しやすいし。

厳しい冬の終わりを告げる春というが、厳しさがだんだんゆるむということではだらけてはいるが逆に秋はだんだん緊張感がでてくる。ややいいわけかもしれないが。

とにかく秋だ。秋はあのふんいきがいいんだ。

B組 立花孝朗

- ・ 秋は厳しい冬に対しての心がまえを必要とする時期で、人間としてひとまわり大きくなる季節だと思う。また、夏しか燃えることのできない君はかわいそうだな。夏の気持ちを秋に継続できないのか。厳しい冬にたえるための秋がすばらしいと思う。

C組 小松義宏

- ・ 秋はA君のように部活や遊び、文化祭・体育祭があり、夏よりも楽しめる季節である。「春は寂しい冬が終わり明るくなる季節が好きだ。」という人が多いようだが、春の行事といえば、入学式・クラス分けなどが思い浮かべられる。それは、新しいといえば聞こえはいいかもしれないが、大きな自分の周囲の環境の変化である。そんな周囲の変化に対応している間に、はなやかな春はあっさりと過ぎ去ってしまう。だから、春よりも秋の方が良い。

C組 米山忠寛

〈秋〉

A 秋はその前の季節夏の暑さがなくなってくる頃なのですごしやすい。また、魚や貝、きのこなどがおいしい。そして、すすき・秋桜など秋の花は春の花に比べおちついた印象がある。

秋は空が澄んでいて空がきれいだ。夕日も映えるし夜は本当に吸い込まれるような漆黒の闇となる。日中も秋晴れがすばらしい。

秋は紅葉、春は新緑、どちらも好きだが、色彩の豊かな葉を持つ季節の方が少し上か。でも一番好きなのは冬なので、春・秋どちらも甲乙つけがたい心境です。

《A君に反論。春の方がやはりすばらしいのです。》

- ・ 落ち着いた雰囲気とか、寂しい雰囲気とかいうのは、極めて内交的な感情であり、何にしてもあまり活発でなく、自分の世界に入り込んでしまうような危ない人物の思想である。よって外交的であり、活発である春の暖かい雰囲気が好きなのだ。

A組 天沼信博

- ・ 春は寒い冬が終って開放的な気分になるし、春の花は秋の花にはないはなやかさをもっている。

また、雲一つない秋晴れとは違い、いくらか雲のある春の晴天もまた変化があってももしろい。それに秋の夜はするどいイメージがあるが、春の夜にはそのようなイメージはなく、のんびりしてよい。

B組 白石 悠

- ・ 夏はとても暖かく、運動をしたり、汗をかいったりするのに気持ちの良い季節である。寒くて室内にこもりがちであったが冬が終われば、外に出て自然を味わうことができ、また、それが冬にできない分、気持ち良い。

紅葉を見ていれば、たしかに落ち着くが、桜を見れば、それまでの寒さを忘れて、楽しい気分になれる。そうすれば、その後の活動的な季節を楽しく過ごすことができる。

このように考えれば秋より春の方がすばらしいと思われる。但し、これは個人の感覚や性格により大きく左右されるので、A君を言いくるめることができるとはとうてい思えない。でも、僕にとってはこの温かい雰囲気や暖かさが最高なのだ。

B組 須賀可人

- ・ ① 冬が好きだから、もうすぐそれになる秋はいい。
- ・ ② 秋の澄んだ空よりも、春のうっすらとほやけている芸術的な空の方がきれいに見える

はずだ。

- ③ 貝は、春も採れ、貝堀りとかは、春がシーズンである。食べ物に関していえば、きのこを除けば、果物などの点でも、おいしいものが多い。

C組 高村将司

・ 僕は春の方が好きな理由として、動物が冬眠に入るという冬を迎えようとしていることから、季節的にくらいイメージがあるということ。また、冬を越して、これから動物が活発になろうとする活動的になっていく季節、これが、春だということがあるが、当然動物が活動的になる季節が春なのだから、人間にとっても、非常に暮らしやすいし、むしろ、秋よりはぼかぼか日が照って過ごしやすいと思う。冬に「小春日和」とあり、ぼかぼかして気持ち良い時季をいっている。冬のちょっとした暖かさを「春」を使って表していることから、日本人々がいかに春を過ごしやすく感じているかがうかがえるし、現にととても過ごしやすい。次にA君は秋の花がおちついているというが、これは表面的に見ているからであって、地下には根がしっかりと根付いていることを考えているのだろうか。春はこれから成長していきこうと、しっかり土台を固めているのだから、真の意味で、落ち着いた印象を、僕ははっきり感じている。そして、秋と春の空の違い、たしかに秋は澄んでいて、夜もきれいかもしれない。しかし、春の空だって、少しかすんでいて、その細やかな色合をだして、とても趣を感じる。しかも、春ならではの「夜桜」というのは、とても春の夜を神秘的に引き出してくれる。春は春ならではの個性的な空が表現されていると、僕は感じる。

・ 春と秋どちらがいいか、秋のメインといえば「紅葉」になるだろうか。とても美しいし、色合いも豊かだ。でも、春には、それに匹敵するほどの様々な色合がある。その面で甲乙つけ難いが、今述べたようなことから、A君がいう秋より春の方がとても趣があり、すばらしいと思う。

C組 稲生剛礼

(2) [高校—季節感を主とした古典の学習指導—]

(日時) 1994年11月18日(金) 第2校時

(授業者) 福田 孝

(授業クラス) 高校2年1組 男子41名

(研究テーマ) 中・高6ヶ年を見通した古典教材の編成

(教材) 『枕草子』『五月の御精進のほど』(本文は新潮日本古典集成)

(単元名) 古典の世界における季節感の展開

(単元設定の理由)

季節感の成立とその定着そしてその展開, といったことを考えて教材を単元学習的に配置してみた。これによって古典の世界の中で描かれる季節に関わる事象をより深く意識して読解できるようになること, 古典の世界で形作られた季節感が日本文化の伝統として現代に至るまでいきづいていることに気付かせること, 古典の世界で触れる季節感と現代の我々が漠然と季節感といっているものの同一性と差異とを考える契機を生徒に与えること, といった三つのことが可能になると考えたからである。全十四時の展開の大きな流れについて述べると, 第1・2時で七世紀末中国暦法の移入によってそれまで漠然としていた四季の観念がはっきりとした枠組みを持って確立されたことを『万葉集』の作品を扱いながら理解させる。生徒は四季の観念の存在を当たり前のように受け止めているが, そうではないことを示すことによって季節感の存在に興味を抱かせたいためである。第3・4・5・6時において九世紀後半に四季それぞれの季節の代表的景物として和歌の世界で何を詠むべきかが定まっていったことを理解させる。特定の季節と特定の景物との結び付きが出来上がり, それが文化の伝統を築き上げていくことを理解させたいためである。第7時から第14時までで, 前時までに学習した, 季節の枠組みと, 季節と景物との結び付きを基にしながら, 具体的に『源氏物語』『枕草子』『徒然草』を読み, 個々の作品で季節感がどのように扱われているかを理解させる。古今集で完成した季節感からどの程度離れ, どの程度その流れに止まって作品をなしているかをみることによって個々の作品の特質を理解させたいと考えるからである。

本時においては『枕草子』『五月の御精進のほど』の章段を教材として設定してみた。『枕草子』章段中でも散文としてリズム・闊達さを持ち生徒には受け入れられやすい章段であると考えたこと, 当時夏の代表的景物である「ほととぎす」を扱っていること, 宮中の外に「ほととぎす」の声を聞きに行くという極めて異例の行為をし, それに伴うはずの詠歌という行為が出来ない様子を描いていて, 単に季節感に関わるだけでなく『枕草子』という作品の性質を考えさせることができると考えたためである。

(授業展開) 全14時間

A. 季節感の確立と『万葉集』

第1時 額田王春秋優劣歌（『万葉集』，プリント一）を読み，春という季節と秋という季節がつけられており季節に対する意識が存在したこと，漢詩文の考え方を背景として四季の中でも春秋がもてはやされていたことを理解させる。

第2時 持統天皇歌「春過ぎて夏来たるらし白妙の衣ほしたり天の香久山」を読み，この歌が季節の到来を詠む点，夏の爽やかさを詠む点などで特異なことを指摘し，『魏志倭人伝』裴松之注を用いてかつては季節の概念に乏しかったことを説明し，日本に中国暦法が入った時期を説明して（補助資料一）七世紀末に中国暦法の影響で四季の明確な枠組みが成立したらしいことを説明して，持統天皇歌もその影響下にあることを理解させる。また暦日意識と節季意識による二重の四季観についても補足だけは与えて置く（補助資料二）。

B. 季節の景物の定着と『古今集』

第3時 『古今集』巻三夏「ほととぎす」に関わる歌々（プリント二）を読み，各人担当で歌の解釈鑑賞を施させる。（あらかじめ二人一組で下調べをさせ，発表させる形を取る）

第4時 『古今集』巻三夏「ほととぎす」に関わる歌々を読み，各人担当で歌の解釈鑑賞を施させる。

第5時 『古今集』巻三夏「ほととぎす」に関わる歌々の構成について話し合い，古今集の巻構成は一学期に習った万葉集とは異なり，時間の推移を基調とする点を話し合い理解させる。このとき四季の部立の構造も示す（補助資料三）。この古今集の季題・巻構成がその後の勅撰集の規範となっていったこと，高校一年時に学習した『枕草子』宣耀殿女御芳子の『古今集』全巻暗誦のエピソードを思い出させ，当時貴族の間で歌を作る際の基盤となっていったことを理解させる。

第6時 貫之屏風歌（プリント三）を読み，調度品として身の回りに一年十二ヶ月を意識させるものがあり，それが歳時意識を作り上げていたことを理解させる。国風暗黒時代に伏在していた和歌の流れ（補助資料四）が九世紀後半に再興し，歌合題詠によって各季節に関わる季物を定着させていったことも述べ，こうした屏風歌・歌合が背景となって『古今集』の時間の推移に従う配列の考え方が出来たことを理解させる。

C. 季節感と『源氏物語』

第7時 『源氏物語』において春秋優劣論が発展して物語に姿を現すことになる六条院の基本的配置を述べた乙女巻末あたりを示し，六条院の有様を理解させる（プリント四-1）。具体的にやり取りされる，秋好中宮と紫の上との春秋優劣の争いあたり（プリント四-23）を示し，その実際を理解させる。玉鬘十帖・幻巻のような月次屏風の物語の進行を持つものがある，登場人物の誕生が春に偏り死が秋に偏る，など源氏物語の構想中に季節が強く意識されていることを述べる。

D. 季節感と『枕草子』

- 第8時 『枕草子』「春はあけぼの」の段（プリント五）を読み、清少納言が古今集によって形作られていた当時の季節感から逸脱して独自の意識で初段を書いていることを理解させる。
- 第9時 『枕草子』「五月の御精進のほど」の段（プリント六-1234, 補助資料五）を読み（プリント五-2下段l.7まで）、春秋ばかりでなく夏冬が季節としてその魅力を定着しつつあった事実を理解させ、清少納言たちの行為の通例でないことを理解させる。
- 第10時 『枕草子』「五月御精進のほど」の段（プリント六-3下段l.20まで）を読み、ここに描かれる清少納言たちの車の風雅なさま、公信の様子のおかしさを理解させる。
- 第11時 『枕草子』「五月御精進のほど」の段（プリント六-4下段末尾まで）を読み、詠歌免除願のあらましを理解させ、その背景にどのような理由が想定できるかを考えさせ、『枕草子』の独自性について考えさせる。

E. 季節感と『徒然草』

- 第12時 高校一年時に学習した『更級日記』春秋優劣の談話の部分で冬が取り上げられていたことを思い出させ、源氏物語朝顔卷冬の場面・蛭巻夏の場面などを紹介して中世に向けて次第に夏冬が魅力をまじつつあったことを紹介する。『徒然草』徒然草第十九段（プリント七）を読み、吉田兼好が枕草子・源氏物語を意識しながら、四季観をどのように提出しているかを理解させる。
- 第13時 『徒然草』第十九段を読み、吉田兼好が枕草子・源氏物語を意識しながら、四季観をどのように提出しているかを理解させる。
- 第14時 『徒然草』第一三七段（プリント六）を読み、吉田兼好の時代には実物に触れない中世的な美意識が生じていたことを理解させる。またこれまで扱ってきた古典における季節感がその後の連歌・俳諧に流れ込んで行き、季語を作り上げていったことを説明し、太陽暦への変更によってなし崩しになって現代に至っていることを理解させる。

（本時の計画）

- A. 目標
- 一 詠歌拒否のあたりを読み、どのような理由が想定できるかを考えさせる。
 - 二 清少納言の『枕草子』の独自性について考えさせ、理解させる。

B. 展開

①本文朗読

- ・前時までで読んだ内容を前半・後半とに分けてまとめさせる。
- ・ほととぎす詠ができなかったことについての記述を確認させつつ、本時に扱う本文を朗読させる。

②内容把握

(a)本時の本文の内容を理解させる。

- ・指名して重要と考えられる箇所への解釈を試みさせながら、とくに清少納言の詠歌免除願の箇所は丁寧に言い、その論理の組立を板書して整理する。
- ・伊周「こと様なること。…」の発言が誰に向けられているものであるかを敬語などから整理する。
- ・「をかしきことぞたぐひなきや」に主従が理解し合っている様を読み取らせる。

(b)清少納言がなぜ詠歌免除願をするのかを考える。

- ・清少納言は歌が下手であった、清少納言の詠歌免除願をそのままに受け取るなどの答えが想定されるが、実はその場で「その人の…」の歌を詠み返していることに気付かせる。
- ・「晴れの歌」「褻の歌」の説明をし、既習の範囲内でそれぞれに該当するものを挙げる。
- ・「もののをり」の内実は「晴れの歌」を詠む機会であることを理解させ、清少納言の詠歌免除願を額面通りに受け取っていいかどうかも考えさせる。
- ・清少納言がいつている「歌」とは「晴れの歌」「褻の歌」のどちらの性質を帯びたものかを理解させる。

(c)清少納言が本章段を書き付けた意義を考える。

- ・ほととぎす詠が出来なかったのはなぜかを考えさせる。
- ・『古今集』における「ほととぎす」の詠み方の型を思い出させる。
- ・実際に清少納言が感動を受けたのは田舎びた京郊外の有り様であり、「ほととぎす」を詠んだとしても『古今集』にあるような型にはまったものとなり、彼女が感じた実感を込めるためには歌で可能であったかどうかを考えさせる。

③まとめ

第一段においては『古今集』による類型的な季節感と異なる季節の受け止め方を提示していたこと、本段においては季節に関わる観念的類型的な歌が詠めず実感を散文によって書き出していることを確認させる。

(資料)

- プリント一 伊藤 博校注『萬葉集全注 巻一』有斐閣1983年
- プリント二 佐伯梅友校注『古今和歌集』岩波文庫1981年
- プリント三 木村正中校注『土佐日記 貫之集』新潮日本古典集成1988年
- プリント四一 1 2 3 秋山虔ほか校注『源氏物語 3』小学館日本古典文学全集1972年
池浩三『源氏物語－その住まいの世界－』中央公論美術出版1989年
- プリント五・六一 1 2 3 4 萩谷朴校注『枕草子』新潮日本古典集成1977年
- プリント七 佐伯梅友校注『徒然草』創英社全対訳日本古典新書1976年
- 補助資料一 坂本太郎ほか校注『日本書紀 下』岩波日本古典文学大系1965年

- 補助資料二 田中新一『平安朝文学に見る二元的四季観』風間書房1990年
補助資料三 松田武夫『古今集の構造に関する研究』風間書房1965年
補助資料四-1 2 萩谷朴『新訂土佐日記』朝日新聞社日本古典文学全書1965年
補助資料五 萩谷朴校注『枕草子 上』新潮日本古典集成1977年

(参考文献)

- 岡崎義恵『古代日本の文芸』弘文堂書房1943年
田中新一『平安朝文学に見る二元的四季観』風間書房1990年
高橋和夫『日本文学と気象』中公新書1978年
広瀬秀雄『日本史小百科 暦』東京堂出版1978年
伊藤 博校注『萬葉集全注 卷一』有斐閣1983年
辰巳正明「季節の誕生」『古代の文学3』武蔵野書院1977年
藤岡忠美「文学史上の「古今和歌集」」『古文研究シリーズ7 古今和歌集』尚学図書1985年
大野妙子「『古今和歌集』夏の歌の成立について」『文学』1977.2
松田武夫『古今集の構造に関する研究』風間書房1965年
風巻景次郎『風巻景次郎全集 新古今時代』桜楓社
長谷川政春「物語・時間・儀礼」『日本文学』1977.11
池田節子「源氏物語の月日設定について」『国語と国文学』1987.12
上野理「清少納言と和歌文学」『枕草子講座 卷一』有精堂1975年
三田村雅子「枕草子「職の御曹司におはします頃」章段の性格」『国文学研究』1980.3

(今回の試みについての検討)

昨年度までの「古典学習の前提となる素養調査」を受けて、古文を学習する上で重要な位置を占めると思われる季節感を主とした単元学習的な授業案を立ててみた。単に伝統としての季節感を確認させるのみならず、「季節感」という枠組みが中国から渡来した暦によって成立したこと、『枕草子』『徒然草』などによって従来からある季節感に修正が施されていったことなどを加えて物事の捉え方の変化・ものの見方の枠組の変化といった側面を補うことにより、生徒の興味を引き出すことが幾分かは出来たように思う。多少教材を詰めすぎて言語事項が手薄になったきらいはあるが、それとでも一つ一つの作品を関連させず、古文の文章を現代語に置き直すことでこと足れりとするよりは、必要最低限の語法をおさえながら一つの主題に立って作品群を読み込んでいくことの方が重要なのではなかろうか。そうした意味で、季節感という主題設定だけでなく、もっと他の主題に立って単元学習的な試みが多々なされるべきであると考えている。個々の作品教材を独立した一個の作品として読み解いてその作品の特色を理解させるだけでなく、複数の作品教材を連関させて読み進める試みが古典教育において今もっともなされるべきことだと思う。

それにしてもわが国の伝統文化に関する理解関心を深めるにおいて最も重要な位置を占めると
思われる季節に関わる授業計画は従来あまりなされてこなかったと思われる。今後もこの方向に
沿いつつ現代に生きる生徒たちにとって何らかの点で関わってくるように教材を扱う可能性を、
中・高6ヶ年の教材編成と関係させて考えていきたいと思う。

士 学校 国語三 二 子夜 図書

春はあけぼの 一 批草

春はあけぼの、やうやうしろくなり行く山は、すこしあかりて、むらみきたらぬ雲のはそくたなびきたる。夏はよる、月のころはきらなり、やみもなほ、ほたるの多く飛びかひた。また、たじとつたつと、ほのかにうひかりて行くもかし、雨など降るもかし。

春はあけぼの、さうさう白く、山はあかり、すこしあかりて、むらみきたらぬ雲のはそくたなびきたる。夏はよる、月のころはきらなり、やみもなほ、ほたるの多く飛びかひた。また、たじとつたつと、ほのかにうひかりて行くもかし、雨など降るもかし。

183 春はあけぼの

とちかやうなるに、からすのむらみ、行くこと、みづつと、ふたつと、なごびいそくさへあはれなり。また、たじとつたつと、ほのかにうひかりて行くもかし、雨など降るもかし。

春はあけぼの、さうさう白く、山はあかり、すこしあかりて、むらみきたらぬ雲のはそくたなびきたる。夏はよる、月のころはきらなり、やみもなほ、ほたるの多く飛びかひた。また、たじとつたつと、ほのかにうひかりて行くもかし、雨など降るもかし。

新古今和歌集 春はあけぼの 一 批草



春はあけぼの、さうさう白く、山はあかり、すこしあかりて、むらみきたらぬ雲のはそくたなびきたる。夏はよる、月のころはきらなり、やみもなほ、ほたるの多く飛びかひた。また、たじとつたつと、ほのかにうひかりて行くもかし、雨など降るもかし。



春はあけぼの、さうさう白く、山はあかり、すこしあかりて、むらみきたらぬ雲のはそくたなびきたる。夏はよる、月のころはきらなり、やみもなほ、ほたるの多く飛びかひた。また、たじとつたつと、ほのかにうひかりて行くもかし、雨など降るもかし。

春はあけぼの、さうさう白く、山はあかり、すこしあかりて、むらみきたらぬ雲のはそくたなびきたる。夏はよる、月のころはきらなり、やみもなほ、ほたるの多く飛びかひた。また、たじとつたつと、ほのかにうひかりて行くもかし、雨など降るもかし。



春はあけぼの、さうさう白く、山はあかり、すこしあかりて、むらみきたらぬ雲のはそくたなびきたる。夏はよる、月のころはきらなり、やみもなほ、ほたるの多く飛びかひた。また、たじとつたつと、ほのかにうひかりて行くもかし、雨など降るもかし。

中三 国語 日本と季節「春秋の争い」古事記より

春はあけぼの、さうさう白く、山はあかり、すこしあかりて、むらみきたらぬ雲のはそくたなびきたる。夏はよる、月のころはきらなり、やみもなほ、ほたるの多く飛びかひた。また、たじとつたつと、ほのかにうひかりて行くもかし、雨など降るもかし。

春はあけぼの、さうさう白く、山はあかり、すこしあかりて、むらみきたらぬ雲のはそくたなびきたる。夏はよる、月のころはきらなり、やみもなほ、ほたるの多く飛びかひた。また、たじとつたつと、ほのかにうひかりて行くもかし、雨など降るもかし。

春はあけぼの、さうさう白く、山はあかり、すこしあかりて、むらみきたらぬ雲のはそくたなびきたる。夏はよる、月のころはきらなり、やみもなほ、ほたるの多く飛びかひた。また、たじとつたつと、ほのかにうひかりて行くもかし、雨など降るもかし。

小学館 日本国文学会 古事記 上代歌集 校注 昭和

「大江山の北にありて...」
近江大津宮に天の宮と名づけたまは...
天原の宮に天の宮と名づけたまは...
天原の宮に天の宮と名づけたまは...

額田王の歌を詠んで

彼王が春と秋のどよ
な思もどれわれ長所短所
し〜し〜かと思えてや

近江大津宮の天皇の御代に...
天原の宮に天の宮と名づけたまは...
天原の宮に天の宮と名づけたまは...

日本書紀の序(小倉隆)

小倉隆の序文...
天原の宮に天の宮と名づけたまは...

平平時代の人

平平時代の人...
天原の宮に天の宮と名づけたまは...

冬ごもり 春さり来れば 鳴かざりし 鳥も
来鳴きぬ 咲かざりし 花も咲けれど 山を
しみ 入りても取らず 春を以て見
ず 秋山の 水の流を見ては 涙をば 取
りてそしのふ 泪をば 霞を以て 取
こしはめし 秋山をば

近江大津宮御宇天皇代...
天原の宮に天の宮と名づけたまは...

「春秋の争い」...
天原の宮に天の宮と名づけたまは...



図説(源氏物語)

「春秋の争い」...
天原の宮に天の宮と名づけたまは...



日本書紀の序(小倉隆)

「春秋の争い」...
天原の宮に天の宮と名づけたまは...

とを思ひ別れしめたまふ時に 皇田正統をもちて 持て 取

は 各こり 春さ來れば

鳴かすありし 笛も來ぬわ

吹かすありし 花も吹けれど

山を踏み 入りても取らず

仄陰ち 取りても見す

秋山の 木の葉の影は

雲をたに 取りても取らず

夕まきは 霞さすを噴く

そこ恨みし 秋山我れば

山はかやどの 露なかりに 山はかやどの 露なかりに

うははれて こそをたまたま ちかき ちかき

表1 国語 漢字 漢字表

「国語漢字表」国語漢字表

第一	漢字	六十
第二	漢字	六十
第三	漢字	六十
第四	漢字	六十
第五	漢字	六十
第六	漢字	六十
第七	漢字	六十
第八	漢字	六十
第九	漢字	六十
第十	漢字	六十
第十一	漢字	六十
第十二	漢字	六十
第十三	漢字	六十
第十四	漢字	六十
第十五	漢字	六十
第十六	漢字	六十
第十七	漢字	六十
第十八	漢字	六十
第十九	漢字	六十
第二十	漢字	六十

表2 国語 漢字 漢字表

「国語漢字表」国語漢字表

第一	漢字	六十
第二	漢字	六十
第三	漢字	六十
第四	漢字	六十
第五	漢字	六十
第六	漢字	六十
第七	漢字	六十
第八	漢字	六十
第九	漢字	六十
第十	漢字	六十
第十一	漢字	六十
第十二	漢字	六十
第十三	漢字	六十
第十四	漢字	六十
第十五	漢字	六十
第十六	漢字	六十
第十七	漢字	六十
第十八	漢字	六十
第十九	漢字	六十
第二十	漢字	六十

(国語漢字「国語漢字表」漢字表)

表3 国語 漢字 漢字表

「国語漢字表」国語漢字表

第一	漢字	六十
第二	漢字	六十
第三	漢字	六十
第四	漢字	六十
第五	漢字	六十
第六	漢字	六十
第七	漢字	六十
第八	漢字	六十
第九	漢字	六十
第十	漢字	六十
第十一	漢字	六十
第十二	漢字	六十
第十三	漢字	六十
第十四	漢字	六十
第十五	漢字	六十
第十六	漢字	六十
第十七	漢字	六十
第十八	漢字	六十
第十九	漢字	六十
第二十	漢字	六十

表4 国語 漢字 漢字表

「国語漢字表」国語漢字表

第一	漢字	六十
第二	漢字	六十
第三	漢字	六十
第四	漢字	六十
第五	漢字	六十
第六	漢字	六十
第七	漢字	六十
第八	漢字	六十
第九	漢字	六十
第十	漢字	六十
第十一	漢字	六十
第十二	漢字	六十
第十三	漢字	六十
第十四	漢字	六十
第十五	漢字	六十
第十六	漢字	六十
第十七	漢字	六十
第十八	漢字	六十
第十九	漢字	六十
第二十	漢字	六十

古今和歌集序

（以下省略部分和歌集序内容）

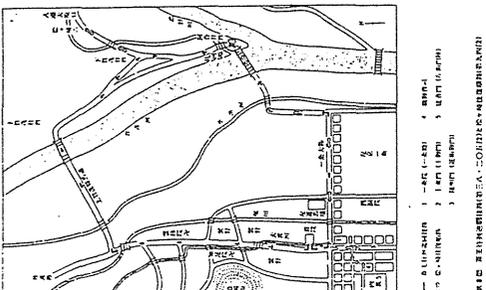
地圖 和 建築圖一

(1) 建築圖 (Architectural Drawing) 是根據設計方案，用正投影法繪製的，用以說明建築物的構造、材料、施工方法和裝飾等。它包括平面圖、立面圖、剖面圖、透視圖等。
 (2) 建築圖的繪製，應根據設計方案的要求，選擇適當的比例和圖幅，並根據建築物的特點，選擇適當的繪圖方法。
 (3) 建築圖的繪製，應注意線條的粗細、顏色和圖例的使用，以使圖面清晰、美觀。
 (4) 建築圖的繪製，應注意圖面的佈局和標註的準確性，以使圖面易於閱讀和施工。
 (5) 建築圖的繪製，應注意圖面的整潔和圖例的統一，以使圖面具有專業性。

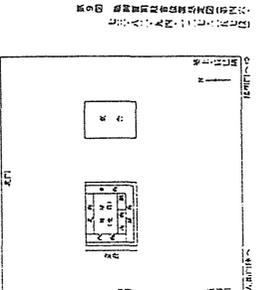
(1) 建築圖的繪製，應根據設計方案的要求，選擇適當的比例和圖幅，並根據建築物的特點，選擇適當的繪圖方法。
 (2) 建築圖的繪製，應注意線條的粗細、顏色和圖例的使用，以使圖面清晰、美觀。
 (3) 建築圖的繪製，應注意圖面的佈局和標註的準確性，以使圖面易於閱讀和施工。
 (4) 建築圖的繪製，應注意圖面的整潔和圖例的統一，以使圖面具有專業性。

地圖 和 建築圖二

1. 建築圖的繪製
 2. 建築圖的應用

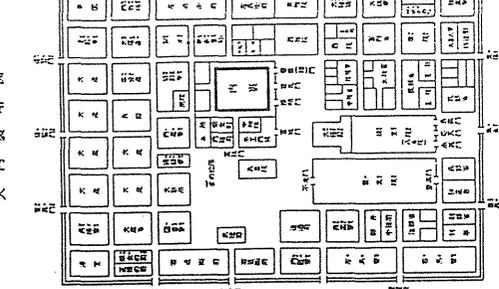


1. 建築圖的繪製
 2. 建築圖的應用



1. 建築圖的繪製
 2. 建築圖的應用

火內頁略圖



火內頁略圖

